



地域力は、防災の原動力！  
高島市総合防災訓練「上古賀区避難訓練」

■表紙の写真

10月26日(日)、高島市総合防災訓練が市内各地で行われ、市民や各関係機関など約4千人が参加しました。自主防災組織では、46の自治会で訓練が行われ、上古賀区では、陸上自衛隊との合同で訓練が行われました。午前8時、サイレンを合図に、各組ごとに避難誘導訓練、消火栓の使用方法等の講習、自衛隊との炊き出し訓練が行われました。上古賀グラウンドに設置された災害対策本部では、防災マップなどに収集された情報が次々と書き込まれ、その情報をもとに、消防団員が避難できない高齢者の安否確認に回るなど、本番さながらの訓練が繰り広げられました。

- ②-④ お知らせ拡大版
- ⑤ いきいき元気生活
- ⑥・⑦ みんなで子育て、親育ち！  
地域で子育て、親育て！
- ⑧ 防災・消防情報
- ⑨-⑪ 情報お知らせ版
- ⑫ 警察・交通事故発生状況・消費生活相談
- ⑬ 文化情報
- ⑭ 人権を考える、藤樹先生の逸話

広報たかしま  
(平成20年11月15日号)

第79号

発行／高島市 編集／企画部秘書広報課  
〒500-0001 滋賀県高島市新旭町北畑500-0005番地 ☎0740(25)81-30

http://www.city.takashima.shiga.jp  
E-mail: info@city.takashima.shiga.jp

シリーズ  
人権を考える  
パート③

子どもの健やかな成長を願って  
子どもの人権



家庭は、子どもが最初に出会う最も基本的な社会です。そこで、子どもは言葉を覚え、知恵をつけ、さまざまな体験をして人との関わり方や生きることの大切さを学び、優しさや思いやりを心で培います。学校や地域においても同じことがいえます。

自分が周りから一人の人として認められ、愛され、大切にされているという経験の積み重ねから、自分も相手も大切に「心」が育まれるものと考えられています。

しかし、近年の子どもを取り巻く環境は大きく変化し、「児童虐待」や「いじめ」「不登校」などが大きな社会問題になっています。市内小中学校では、平成18年度(2006年)に、いじめ、もしくは、いじめが心配される件数が48件あったと報告されています。

これら諸問題の背景には、家庭や地域の養育機能や教育力の低下、少子化や家族形態の多様化、他人の誤った行動に対しても傍観者の態度をとりがちな社会風潮などがあり、こういった環境の中で子どもたちはストレスを抱えているといえます。

更に、最近ではIT化が進むにつれ、インターネットによる有害情報の氾濫や携帯電話の著しい普及による出会い系サイトを介した事件など、子どもが犯罪に巻き込まれるケースが多く、子どもの人権が侵害されやすい環境になっていることから、子どもを取り巻く有害な環境の浄化や犯罪の取り締まりなど、「家庭」「地域」「学校」「行政」が一体となって子どもたちを守る取り組みが益々重要になると考えられます。

「子どもの人権SOSミニレター」をご存じですか？

法務省の人権擁護機関では、いじめや虐待などが大きな社会問題であり、被害者である子どもは身近な人に相談することをためらうことが多く、重大な結果に至って初めて気付くという事例が少なくないことから、全国の小・中学校の児童・生徒に便せん兼封筒を配布し、これを通じて教師や保護者にも相談できない悩みごとを適格に把握し、子どもをめぐめる様々な人権問題の解決を図る取り組みを実施しています。平成18年度(2006年)では一年間

に約一万一千件の相談が寄せられました。このことから、現在の子どもの多くは、大人が気付かない悩みを抱えながら生活していることが推測されます。

しつけと虐待の違い

「しつけ」は子どもに社会のルールやマナーを教えることなど基本的な生活習慣を教えることをいいます。それに対し「虐待」は、親が子どもに暴力をふるったりすることから、親の身勝手な許されない行為といえます。たとえ愛情に基づく「しつけ」「指導」「教育」でも、子どもの心と身体を傷つける行為であれば虐待といえます。理由が正しくても、行為まで正当化することはできません。

すべての子どもが夢や希望を持ちながら、心身共に健やかに育つことはみんなの願いです。「子どもの人権」について、大人・子ども・地域が一緒に考えていきたいと思います。

高島市人権施策課  
☎(25)85224  
☎(25)81020

藤樹先生の逸話⑧

「朱学でなく心学」

藤樹先生が「中庸」を講じられている時、瀬岡山は、あらかじめ語句の注釈をおぼえて先生の講釈にのぞみ、その書物を見ていたところ、先生は、「注釈書を見てはなりません」と言われました。その意味は、注釈書を見ながら講釈を聴けば、頭の中がごちゃごちゃになってしまつたところから考えられました。

さて、京都からきた二人の男が、聞き書きをしようとする男を走らせたが、先生は朱子のテキストにお構いなく、まっすぐに講釈なされたため、彼らは聞き書きできませんでした。

「解説」

先生は朱子のテキスト「四書集注」とは関係なく、当時の日本人にとっては「心学」という誰も知らない視点から、中庸や論語などを門人たちに講釈したわけです。